ひとびとの目の輝きの増すまちづくり

まちづくりの目指すものは、まちづくりを通じてひとびとの目の輝きの増すような、ひとびとが生き生きと生活できるまちであり、そのためには、地域資源を生かし自ら考え実践するまちづくりを進めることが特に重要といえる。

１．基本的考え方

これまでの、我が国のまちづくりは、シビルミニマムの確保、高度成長を目標に全国一律の基準を適用したまちづくりを進め、それはそれなりの効果をあげてきたともいえよう。しかし、ソフト化・サービス化が進展し生活におけるこころの豊かさが強く求められる中において、これまでの効率重視のやり方では時代のニーズに応えられなくなっているのは明らかである。そこで、個性あるまちづくりが大きなテーマとなるが、個性あるまちづくりが目指すものは、結局はひとびとの目の輝きの増すような、ひとびとが生き生きと暮らせるまちづくりともいえよう。

個性あるまちづくりを考える場合に、例えば教育というひとづくりにおいて、それぞれの子供が有している長所を伸ばしてやることが肝心であるように、個性あるまちづくりにおいても、そのまちが有している歴史文化、風土、自然、産業技術、人材等の資源を生かすことが特に重要となるのではなかろうか。こうした点において、これまでのまちづくりは、自らの足元をみることをせずに他の成功事例を追いかけ、結局はその地域に合わない背伸びばかりをしてきたとはいえないだろうか。

こうした反省を踏まえて、これからのまちづくりにおいて、スローフード・スローライフに象徴されるような、歩みは遅くともしっかりと自らの足元をみて自ら着実に築きあげていく、地域の資源を生かし自ら知恵を出し実践していくまちづくりを進めることにより、地域の個性が育まれるとともに、ひとびとの結びつきが強まり地域に対する愛情が深まりひとも輝いてくるのではなかろうか。国・地方の財政が逼迫しこれまでのような大規模な公共投資が難しくなっている中で、地域の資源を生かしたまちづくりは、最も経済的でもあり財政上からも望ましいものといえよう。

従って、ひとづくりにおいて勉強ができる子、運動の得意な子、誰にも愛される明るい子等のそれぞれの長所を発見し育んでいくように、まちづくりにおいても一つでも他に誇れるものを自ら発見し育んでいくことこそが、特に重要といえよう。

こうした私の考える地域のひとびとが中心になって地域の資源を生かしたまちづくりを行っていく姿を、以下に九州のある地方都市でまちづくりに参加した人からの報告というかたちで物語風にイメージしてみることとする。

２．まちづくり物語（まちづくり参加者の報告というかたちで）

かって多くの人で賑わった中心市街地から次第にひとびとの姿が減っていき、買物時で

さえ中心商店街は閑散としたありさまとなった。このままでは、このまちはすたれていくだけだと危機感をつのらせた商店主や地域に住む有志が集まり議論を重ねた結果、まづ自分達でできることから始めようとなった。そこで、近くを流れる水路を清掃し、水路沿いには花を植えた。また、商店街の中で空き店舗となっているスペースを借り、イベントコーナーを設け、地域のお年寄りが子供たちに竹馬や竹とんぼといった手づくりの遊びを教えたり、若い人がミニコンサートを開催したりと活発な活動が行われた。さらに、商店主のひとびとも、八百屋さん、魚屋さんは季節の新鮮な材料を使った料理の作り方をお客にアドバイスしたり、衣料品店では若いお母さんの育児の相談にのったり、一人暮らしのお年寄りにＦＡＸサービスで出前することで、買い物客とのふれあいを深めていった。

最初は小さな動きであったが、こうして地域のひとびとが頑張っている姿をみた大学の先生や行政のひとびとも加わり、まちづくりの輪が次第に広がっていき、まちの宝物探しを一緒にやろうということになった。その結果、かつてこのまちが栄えた頃の面影を偲ばせる街道沿いの町屋はまちの歴史を伝える貴重な建物であり、近くを流れる河川には市街地には珍しい魚や水生生物がいること、地域のお年寄りは昔から口伝えされたほのぼのとした多くの民話を知っていることなどがわかり、こうした地域の宝物を生かしたまちづくりを進めようとなった。みんなで、こうした宝物をどう生かすのかを時にはお酒を飲みながら、時には夜を徹して語り合ううちに、こんなに地域のことを愛し、一生懸命に地域づくりに取り組もうとするひとびとがいるということが、地域に対する愛情を深めまちづくりの気運を一層高めていった。

今では、町屋を利用してできた地域の産品を使ったスローフードのレストランや地域のお年寄りによる民話の語り部の部屋は、新聞や雑誌にとりあげられ、まちの外からも多くの人が訪れこころを癒されると好評を得ている。また、こうしたまちづくりに賛同する方が、近くを流れる川の生き物を集めたミニ水族館を自宅に敷地の中につくり、訪れる子供たちに生き物の生態について興味深く語り、子供たちの人気を博している。

こうしたことで、少しずつではあるがまちを訪れるひとびとが増えてきて、まちに活気が出てきた。それにつれて、酒屋の息子さんが東京から戻ってきたように、まちに戻ってくる人や他のまちから移り住む人が増えてきた。以前、このまちにはなにもないとうそぶいていた人も、今ではこのまちが少し誇れるようになったと照れながら言っていたのが印象的であるが、なによりも、地域のお年寄りがまちづくりに参加することで元気が出てきたと言ってくれたことがとても嬉しかった。こうして、地域のひとびとの目の輝きが増し、地域が明るくなったと感じるのは、これまでに地域の様々なひとびとが一緒になって地域の資源を生かした手づくりのまちづくりを一歩ずつ進めてきた結果といえよう。